

## ALOS/PALSAR によって観測された , アリューシャン列島オクモク火山の2008年噴火

### The 2008 eruption of Okmok volcano in Aleutian Islands observed by ALOS/PALSAR

# 宮城 洋介 [1]

# Yosuke Miyagi[1]

[1] JAXA/EORC

[1] JAXA/EORC

2008年7月12日(UTC)アリューシャン列島にあるOkmok(オクモク)火山が11年ぶりに噴火を開始した。Okmok火山はアリューシャン火山列にあるUmnak(ウムナック)島に位置し、19世紀以降10回以上の噴火が記録されている活発な火山である。Okmok火山周辺には人口は少なく、噴火による人的被害は少ないと思われるが、上空の航空機の往来が盛んであり、大規模な噴火が航空機事故に繋がる恐れがある。2008年噴火では、噴煙が15000m上空にまで達し、幸い事故等はなかったが、国際線のスケジュールに影響が出た。また2008年噴火では、これまで噴火を起こしてきた噴火口からではなく、カルデラ中心近くに新しい噴火口を作り、そこから噴火を起こした。宇宙航空研究開発機構(JAXA)は、2006年に打ち上げ運用している陸域観測技術衛星だいち(ALOS)を使い、噴火前後にOkmok火山の観測を行った。だいち搭載の合成開口レーダーPALSAR(パルサー)は、雲や噴煙も透過して地上を観測することができるセンサーである。噴火前後のPALSAR画像を比較することにより、Okmokカルデラ周辺の地表状況の変化を検出することができ、カルデラ中心付近にできた新しい噴火口の位置や、カルデラから放射状に流れ一部では海にまで達している泥流の様子などを把握することができた。また、噴火後のPALSARデータを差分干渉(DInSAR)処理することにより、噴火開始から約1ヵ月半後の時点では山体の収縮が継続しており、まだ噴火は終息していなかった事が分かった。